

都市部との交流を通じた過疎コミュニティの活性化に関する事例紹介-高千穂町秋元の試み-

A Case Study of Rural Community Vitalization through Exchange Activities with Urban Residents* - Based on a Case of Akimoto Settlement -

吉武哲信**・出口近士***・飯干淳志****

By Tetsunobu YOSHITAKE**・Chikashi DEGUCHI**・Atsushi IHHOSHI

1. はじめに

九州では多くの中山間地域に属する集落が過疎に直面しており、その持続可能性に課題を抱えている。これらの集落では、基幹産業である農林業の不振にあえいでいるが、道路や産業団地等の基盤施設整備を行なってその地域の経済発展を期待する「経済開発的アプローチ」は必ずしも有効でなかった現状がある。また、今後の人口減少・少子高齢化社会における社会基盤施設への投資余力の縮小を考えると、この種のアプローチのみによる地域活性化には限界があろう。この認識から、住民の意欲や誇りの醸成をまず達成し、そこから経済的發展を目指す「社会開発方式」の重要性が高まっている¹⁾。この考え方はまた、近年のまちづくり等で注目されているソーシャル・キャピタル^{2,3)}とも通底するものである。

また、住民の意欲や誇りの醸成において外部者との交流が重要な役割を占めること⁴⁻⁶⁾、交流で築かれる外部者とのネットワークそのものがソーシャル・キャピタルとして考え得ることを踏まえると、上述のような活性化において外部者との交流は重要といえる。

さて、宮崎県高千穂町秋元集落では、平成7年以降、主に福岡市博多部住民をはじめとした外部者との交流活動を続け、住民の意欲や誇りの醸成、むらづくり活動の活性化に一定の成果を修めているところである。本稿ではその活動を紹介するとともに、その内容と成果に関し分析し、その上で、交流を基軸としたコミュニティ活性化のあり方に関し若干の考察を行なうものである。

2. 分析の枠組み

本稿では、第3章で秋元集落の社会経済的状況および交流の経緯を概観し、第4章で交流を通じたコミュニティ活性化に関する分析を行なう。分析は、a)ヒアリング

*キーワード：地域活性化、交流、過疎集落

**正員、博(工)、宮崎大学工学部土木環境工学科 (宮崎県宮崎市学園木花台西1-1、TEL0985-58-7331、FAX0985-58-7344)

***正員、工博、宮崎大学工学部土木環境工学科

**** 高千穂町役場企画情報課 (宮崎県西臼杵郡高千穂町三田井13、TEL0982-73-1207、FAX0982-73-1225)

調査で収集された住民の交流に関する評価にもとづいて、各々の評価とAGIL図式¹⁾⁴⁾上の関係を把握することで社会開発方式上の進展度を明らかにし、また、各評価とソーシャル・キャピタルの成立要件である規範・信頼との関係、社会的ネットワークの性格 (Bonding, Bridging型) を明らかにして、交流のコミュニティ活性化上の成果を明らかにする。次いで、b)交流で形成された外部者のネットワークの規模、構成メンバーの特徴に関し明らかにし、ソーシャル・キャピタルの成長に関し評価するものである。

また、第5章では、著者らが先に提案した交流マネジメントの枠組み⁷⁾用い、戦略的な交流プログラム構成の観点から本交流を検証する。

3. 秋元の概要および交流の経緯

秋元は、高千穂町の南部、海拔380~500mの山間部に位置する山間集落である (写真-1 参照)。町中心部から約12km、車で約20分の距離にあり、主たる収入は中心部での就業から得ている兼業農家も多い。人口は、図



写真-1 秋元集落の風景

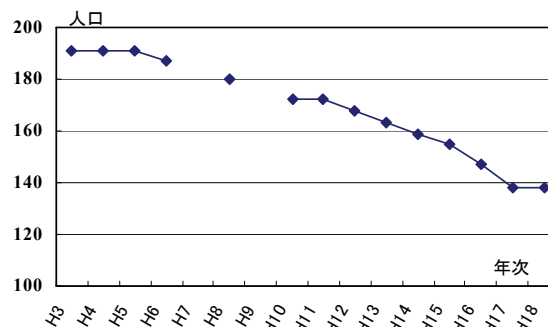


図-1 秋元集落の人口変化

表-1 秋元の交流活動の経緯

年	月	交流機会	場所	参加者	期
H7	11	夜神楽	秋元	ごりよんさんの会/ルーヂュクラブ	
H8	7	山笠見学ツアー/女性交流会	福岡	ごりよんさんの会/ルーヂュクラブ	
	8	研究室合宿	秋元	大学生/秋元住民	
	11	夜神楽	秋元		
H9	5	山笠説明会	秋元	山笠役員/秋元男性	1
	7	山笠	福岡	グリーンクラブ	
		交流会	福岡	ごりよんさんの会/ルーヂュクラブ	
	11	夜神楽	秋元		
H10	7	山笠	福岡	グリーンクラブ	
	11	夜神楽	秋元		
H11	7	研究室合宿	秋元	研究室学生/秋元住民	
	7	山笠	福岡	グリーンクラブ	
	10	稲刈りツアー	秋元	博多親戚クラブ/秋元住民	
	11	テレビ番組取材	秋元	秋元住民	
	11	夜神楽	秋元		
H12	7	山笠	福岡	グリーンクラブ	
	8	研究室合宿	秋元	研究室学生/秋元住民	
	8	公民館活動発表会	M	グリーンクラブ/ルーヂュクラブ	
	9	公民館活動招待講演	福岡	グリーンクラブ/ルーヂュクラブ	
	10	稲刈りツアー	秋元	博多親戚クラブ/秋元住民	
	11	夜神楽	秋元		2
H13	7	山笠	福岡	グリーンクラブ	
	11	夜神楽	秋元		
H14	5	山笠ツアー	秋元	博多親戚クラブ/秋元住民	
		夜神楽衣装の再生開始	福岡	博多親戚クラブ・ごりよんさんの会メンバー	
	7	山笠	福岡	グリーンクラブ	
	11	夜神楽	秋元		
	12	クラシックコンサート	秋元	音楽家(博多親戚クラブメンバー) 秋元住民/福岡・宮崎関係者	
H15	7	山笠	福岡	グリーンクラブ	
	8	研究室合宿/ワークショップ(1)	秋元	研究室学生/秋元住民/博多親戚クラブ	
	11	夜神楽	秋元		
	12	研究室合宿/ワークショップ(2)	秋元	研究室学生/秋元住民	
H16	7	山笠	福岡	グリーンクラブ	
	7	研究室合宿/ワークショップ(3)	秋元	研究室学生/秋元住民 博多親戚クラブ/東京関係者	
	11	夜神楽	秋元		
H17	5	研究室合宿/ワークショップ(4)	秋元	研究室学生/秋元住民/東京関係者	3
	7	山笠	福岡	グリーンクラブ	
	8	コミュニティバス研究開始	福岡	研究室学生	
	11	夜神楽	秋元		
H18	5	山小屋維持管理	福岡	グリーンクラブ/博多親戚クラブメンバー	
	7	山笠	福岡	グリーンクラブ	
	10	稲刈りツアー	秋元	宮崎・福岡関係者/秋元住民	
	11	夜神楽	秋元		

表-2 ヒアリング対象者

	参加者	
	成人	高校生以下
H14以前	-	-
WS(1) H15.8	20	7
WS(2) H15.12	15	0
ヒアリング H19.5	8	3

ー1に示すように年々減少しており、集落の持続可能性については住民の多くが懸念を抱いているところである(平成7,11年についてはデータが欠損している)。

集落では、将来の持続可能性に関する危機感への対応と共に、日常の生活に喜びやリズムをもたらすことも意図して、中堅男性(グリーンクラブ)や中堅女性(ルーヂュクラブ)を中心とした集落活動を継続してきた。

秋元集落が交流を通じたコミュニティ活性化に踏み出したのは平成7年である。交流活動の経緯と内容を表-1に示す。交流のきっかけは、平成7年秋に、第1著者と「博多ごりよんさんの会」会員が第3著者の招きで夜神楽を訪れ、秋元の女性と出会ったことである。

翌年の平成8年夏、今度は博多山笠の見学にルーヂュクラブ会員が博多を訪れ、ごりよんさんの会との交流会を持った。この際、農村と都市との違いはあれ、過疎化、伝統的祭の維持等の共通の問題が発見され、女性同士の交流を継続することが確認された。

その後、グリーンクラブもこの交流に加わり、平成9年から博多山笠に参加し、以降、山笠の担い手との交流を継続している。また、平成11年からは宮崎大学の研究室合宿を秋元で実施し、教員・学生と地元住民との交流

表-3 住民による交流活動の評価

年	住民による評価	LIGA	ソーシャルキャピタル	
			規範/信頼	Network
H14以前	共感 博多の人たちも過疎化、高齢化、伝統といった我々と同じ問題を抱えていることがわかって共感を持った。	L	規範	Br./Bo.
	秋元での責任感の強化 夜神楽にもっと真剣に取り組まないといけないと思った。 我々の伝統はどんなことをしても守り抜かないといけない。 我々の交流経験をほかの住民にも教えてあげたい。 我々の交流経験をほかの住民たちと分かちあいたい。	L, I	規範	Bo.
第1期	発見と自信の強化 今まで何もないと思っていたが、多くの大切なものに気がついた。 今まで価値がないと思っていたものが大切であることに気づいた。 コンサートの企画・実施によって自信がわかった。 秋元にすむことの誇りを得ることができた。	L	規範	Bo.
WS(2)	子供たちの感想 秋元がとてつもない村であることに気づいた。 知らなかったことがたくさんあることに驚いた。 将来も今のままの秋元であってほしい。	L, I		Bo.
H15.8	成人の感想 子供たちがやったことに本当に感動した。 子供たちのしたことにより、秋元の本当の価値に気がついた。 子供たちのすばらしい力に気がついた。	I, G	規範	Bo.
WS(3)	発見と自信の強化 人と人の関係を考えるようになった。 秋元にすむことの誇りを持てるようになった。 秋元住民であることを誇りに思える。 秋元にすむ決心をしたことを改めて思い起こした。 秋元はすばらしい村であることがわかった。 秋元の住民同士のつながりはよいことがわかった。	L, I	規範・信頼	Bo./Br.
H15.12	秋元での責任感の強化 夜神楽に一生懸命取り組まないといけないと思った。 田舎の住むことの意義を理解できた。	L, I	規範	Bo.
第2期	秋元集落の持続可能性 集落には収入源がないので後継者が残らない。 交流のみでは就業機会や収入増大にはつながらない。 退職後の収入を確保する方法が必要である。 10年後は秋元の人口は半分になるだろう。 就業機会が少ないので、子供たちに帰ってこいとは言えない。 退職後の収入確保の方策について今から考えないといけない。	A		Bo.
	交流の意味の気づき 我々の村の将来を交流を通じて考えないといけない。 我々とは交流によって築かれた幅広い人的ネットワークがある。 交流は結局、楽しみにしかついでない。 交流では経済的活性化は進まない。	A, G		Bo./Br.
	経済および将来展望 秋元の風景は外の人の力を借りても守らないといけない。 我々の産物のブランド化が必要である。 村には商品となりそうなものはある。 交流によって得た人的ネットワークは我々のアドバンテージである。	L	規範・信頼	Bo./Br.
ヒアリング	秋元の変化 山笠で刺激を受け子供を集落行事に参加させるようになった。 山笠への参加は日常生活にほりを与えてくれた。 高齢者の外部の人の見方が変わった。 交流は高齢者にも日常生活のほりを与えている。	L, I	規範	Bo.
H19.3	発見と学び 交流によって自分自身を知ることができる。 交流とは学ぶことである。 交流を通じて、自分が秋元に何ができるのか分かった。 他の過疎集落から学ぼうとする人が出てきた。 我々の人生の目的は集落を守ることである。 博多との交流は続けない。	L, I	規範	Bo.
第3期	経済 稲刈りツアーは労働力としても助かっている。 何人かの住民は新たな収入源確保の方策を研究し始めた。	A		Br.
		G, A		Bo.

(Notes: 1) A, G, I, L: AGIL図式上の位置づけ, 2) Bo: Bonding, Br.: Bridging

会も行なわれている。

平成11年頃からは、博多ごりよんさんの会の一部メンバーおよびその家族や友人で構成されるグループ「博多親戚クラブ」が自ずと形成され、以降の秋元の交流活動を積極的に担っている。稲刈りツアー等のグリーン・ツアーリズム体験、研究室合宿と合同でのワークショップの開催は、秋元の中堅グループのみならず、高齢者、子供(小中学生)も参加する交流機会となっている。また近年のワークショップは、積極的に集落の将来展望を考える機会として企画されるようになってきた。

さて、以上の交流の経緯をその内容から性格づけると、表-1右欄に示すように3つの期に区分することができよう。すなわち、第1期は交流の初動期であり、出会いの時期であった。第2期は、博多親戚クラブの形成と個人ベースの交流の発展期であり、信頼醸成の時期といえる。また第3期は、第2期で形成された個人ベースの信頼

表-4 WS参加者の変遷

	秋元		外部	
	成人	子供	学生	成人
WS (1) H15.8	20	7	10	13
WS (2) H15.12	25	7	13	10
WS(4) H17.5	20	-	10	20

を元に多様な人々を巻き込みながら集落の将来像を模索し始めた目標形成の時期といえよう。

4. 交流を通じたコミュニティ活性化

(1) ヒアリング調査の概要

本章では、表-1で示したような交流活動に対する地元住民の評価、およびそれら評価のコミュニティ活性化上の意味に関し検討する。住民の評価は、ワークショップおよびヒアリング調査における住民の発言によるが、その参加者人数は表-2に示すとおりである。なお、平成14年以前の評価に関しては交流活動中および活動後の住民の発言を一括して扱っているために参加人数は不定とした。

(2) 住民による交流の評価

表-3に住民の評価発言のうち主要なものを整理する。各評価発言がA, G, I, L (文獻I,4)で紹介された「糧」「舵」「絆」「礎」に対応する)、および社会的ネットワークの特性としての「規範」「信頼」「Bonding」「Bridging」と関連がある場合に、その内容を表中に示している。

表より明らかなように、交流初期は、L, I、およびBondingに関連する評価が多かったが、交流の継続と共にG, AやBridgingに関連するものが増えている。これは、交流によって社会的な価値基盤(L)や連帯意識(I)がコミュニティ内部で確認され(Bonding)、それが経済的基盤(A)や目標確立(G)、コミュニティ外部との連携(Bridging)に意識が変化したことを示している。

なお、個別の評価内容をみると、「日常生活にはりができた」等の直接的な効果の他、「秋元に住むことの誇りを持てた」等の誇りや自信の回復、「秋元のすばらしさに気づいた」等の価値観の転換があり、また、「神楽に真剣に取り組むようになった」「村での自分の役割がわかった」等の役割認識の強化がみられる。さらに、「交流によって自分自身を知ることができる」や「交流とは学ぶことである」等、他者との交流の意味を理解する評価があることは、交流の大きな成果といえよう。

他方、経済的活性化や集落の持続可能性については、「交流によって経済的活性化は導けない」「交流は楽しみにしかなくない」という否定的意見もあるが、「交流によって得られたネットワークは資源である」「グリーン・ツーリズムは労働力としても助かってい

表-5 ネットワーク構成メンバー

	Ds1*(T)	Ds2(T)	Ds3(T)	Ds4(T)
デザイナー	Ds1*(T)			
建築士	Arc*(F, S)			
土木技術者	CE1*(F, S)	CE2(M)		
プランナー	PI1*(M, S)	PI2*(T)	PI3(T)	
県技術職員	PO1*(M)	PO2*(M)	PO3(M)	
市町村職員	MO1(M)			
コンサルタント	CE1(M)			
カラーコーディネーター	CC1(F)			
音楽家	M1*(F, S)	M2*(F, S)		
工芸家	C1*(F, G, S)	C2(O)		
ボランティアグループ	V1*(F, G, S)	V2*(F, G)		

注 1): *リピーター (3回以上の参加)

注 2): T: 東京, F: 福岡, M: 宮崎, O: 大分

注 3): S: 親戚クラブ, G: ごりよんさんの会

る」等の評価もあり、交流に対して一定の期待は持ちながらも打開策を見いだせていない状況が伺える。

(3) 社会的ネットワークの変化

a) ネットワークの拡大

表-4に、第1,2,4回目のワークショップの参加者を示す。ワークショップは必ずしも外部者数の拡大が目的ではないが、成人外部者の参加が増加したことがわかる。また、秋元成人の参加者は常に20名以上あり、多くの住民が多様な外部者と直接ふれあう機会が確保されているといえよう。その場はまた、秋元の子供と大学生にとっては教育の場ともなっている。

b) 多様なネットワーク構成メンバー

秋元と交流に参加する外部者の特徴は、専門家・技術者の多さとリピーター率の高さである。表-5は、交流に参加した技術者・専門家の一覧を示す。その多くが3回以上の交流に参加するリピーターであることがわかる。専門知識や技術を持つ外部者は住民にとって魅力的であり、それゆえ表-3に示したように「ネットワークは財産である」「交流とは学ぶことである」等の評価を得ていると考えられる。外部者もまた、秋元住民の人柄、ライフスタイル、自然等に魅了され、リピーターとなっているが、外部者の評価に関しては稿を改めて論じたい。

5. 交流マネージメントからの評価

以上のように、秋元における交流は、経済的活性化には到達しえてないものの、一定の成果を得ていると言える。ここでは、交流が10年以上にわたって継続した理由や、成果を得ることができた理由について、交流マネージメントの考え方⁷⁾から検討する。

交流マネージメントは、交流イベント(プログラム)の企画や実施、その支援策、その他交流と直接・間接的に関連する活動を、「来訪・訪問機会の確保」「出会いの支援」「交流の継続」の枠組みから整理し、交流の促進・維持に関する仕組みを評価しようとするものである。

表-6は、秋元での交流に関わる諸活動を、第1~3期の流れに沿って、交流マネージメントの枠組み上に整理したものである。表より、時間の経過とともに訪問・来

表一 6 交流活動の交流マネジメント上の位置づけ

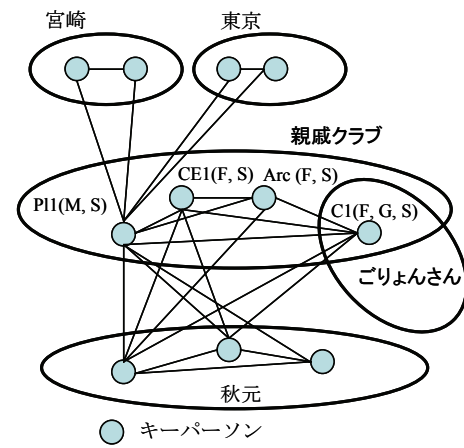
交流マネジメントの 対象	第1期	第2期	第3期
	出会い	信頼醸成	目標形成
訪問・来訪機会の 確保	夜神楽 山笠 研究会合宿	グリーンツーリズム 都市ツーリズム ワークショップ	ワークショップ
出会いの支援	民家宿泊 懇親会	共同作業	
交流の継続	ルーラルタイムズ リーダー間の計画会合	回覧板	
特徴	祭ベース	個人ベース リーダー的メンバーの増加	グループベース 発見 → 多様化

訪機会の種類が増加していること、またそれは、祭りベースの交流からより個人と個人の繋がりで行われるグリーン・ツーリズムや、多人数を参加者としながら対話を促進するワークショップに変遷しているといえる。

また、個人ベースの出会いの支援については、初期の段階から、民家宿泊や集落の多くの住民が参加する懇親会が機能したと言えよう。さらにグリーン・ツーリズムやワークショップは、住民と外部者が共同作業を行なうものであり、個人間の出会いを支援したと考えられる。また、表には示していないが、各イベントにおいてはできるだけ外部者数が住民の参加者数より少数であること、外部者については交流に共感できる人へのみ参加を呼びかけたことも、個人ベースの出会いを成功させる鍵であったと考えられる。

交流を継続させる機能としては、表一 3 で「子供たちがやったことに感動した」と評価されたように、ルージュクラブが発行していた集落誌（ルーラルタイムズ）やワークショップ報告書の回覧等が、交流の意味を振り返りながら次の交流への期待を醸成する機能を有していたと考えられる。また、表には記していないが、交流イベントの企画・実施は、比較的期間において負担が過大にならない程度に抑えられていたことも、継続の要因として考えてよいだろう。

そして何よりも、以上の全体をコーディネートしたキーパーソンのネットワークの役割は重要である。図一 2 は、交流の戦略・企画の立案の議論を担ってきたキーパーソンの繋がりを示したものである（記号は表一 5 に示したものと同様である）。この場合の繋がりとは、日常的に面会あるいは電話等でやりとりできる関係を示す。図より明らかなように、親戚クラブメンバーの存在が特徴的である。親戚クラブはその内部で密接な繋がりを有するとともに、秋元の複数のキーパーソンとも直接的に繋がることにより、秋元の窓口的な位置を占めているといえる。実際、その名が示すように、構成メンバーは家族単位で参加し、また秋元住民とも家族単位の際際すなわち疑似親戚的な交際を保っている。疑似親戚的な人々を窓口とすることにより、互いに安心感が生まれている



図一 2 キーパーソンのネットワーク図

ことも、交流が継続した一つの理由であろう。

6. おわりに

本稿は、高千穂町秋元集落における外部との交流を通じたコミュニティ活性化の試みを紹介し、その内容や成果に関し、AGIL図式、ソーシャル・キャピタルの観点から分析を行なったものである。この結果、秋元においては、コミュニティ内部の基盤が強化され、また外部との繋がりも拡大・強化されたことが明らかになった。

本稿はまた、以上のように交流が一定の成果をあげることができた要因に関し、交流マネジメントの枠組みを用いて考察した。本集落の交流戦略や交流プログラムの企画・実施においては、「来訪・訪問機会の確保」「出会いの支援」および「交流の継続」が機能するような方策が用意されていることが明らかになった。

なお本稿は、著者らが関与しながら進めているコミュニティ活性化活動の中間報告である。共に活動を行なっている関係各位にここに記して謝意を表するものである。

参考文献

- 岡田・小林・高野：過疎地域のコミュニティ活性化に関する基礎的分析，土木計画学研究・講演集 No.12, pp.151-158, 1989.
- Putnam, R. D.: Bowling alone: The collapse and revival of American Community, Simon & Schuster, 2000.
- Sabatini, F.: Social capital gateway, <http://www.socialcapitalgateway.org/>, 2007.
- 岡田・小林・北尾：外部者の参入が山村過疎地域に与える活性化効果に関する研究，土木計画学研究・講演集, No.13, pp.161-168, 1990.
- T.Yoshitake, C.Deguchi, M.Kawano, and Y.Nishida: The Role of Local Artists in Enhancing Community Development: A Case Study in Aya, Kyushu, Japan, Regional Policy and Practice, Vol.7, No.2, pp.40-53, 1998.
- K.Kohmura, T.Yoshitake: A Study on the Role of Communication between Residents and Local Artists in Rural Community Development”, Proceeding of International Symposium on City Planning 1998, pp.495-504, 1998.
- 吉武・竹田・出口：定住作家と住民との交流によるコミュニティ活性化のための交流マネジメントの有効性，都市計画論文集, No.36, pp.481-486, 2001.